

紀要

36

- 初期土偶から中期土偶への展開を読み解く
 —精霊像としての土偶に関する認識の更新と深化を課題として—…………… 瀬口 眞司（1）
- 古墳時代の「石杵」状石製品について
 —蒲生郡日野町播沢遺跡出土事例の紹介—…………… 辻川 哲朗（17）
- 群集墳の築造と被葬者像
 —太鼓塚古墳群を素材として—…………… 堀 真人（24）
- 古墳時代の大刀形製品にかかる覚書…………… 宮村 誠二（40）
- 長浜市八雲書院資料調査報告＜瓦編2＞…………… 福井 知樹（45）
- 遺物三次元計測の実験的試行…………… 山田梨紗子・福井 知樹（64）
- 滋賀県埋蔵文化財地域展Ⅳにおける試みとその成果
 —「広げる」「深める」「育てる」「つながる」展示へ—…………… 木下 義信（78）

長浜市八雲書院資料調査報告＜瓦編 2＞

福井知樹

目次

1. はじめに
2. 採集瓦について
3. 採集地と遺跡認識について
4. おわりに

— 論文要旨 —

「八雲書院」とは、浅井郡田根村大字上野（現長浜市上野町）出身の田中礎氏が収集した考古資料一式のことである。同氏は、昭和 27 年（1952）に収集した資料群を「郷土史研究に役立ててほしい」という思いから、浅井町立浅井中学校（現長浜市立浅井中学校）に寄贈した。寄贈された資料群は「八雲書院」と命名され、浅井中学校から地域資料の魅力を発信していくこととなった。平成 6 年（1994）に「八雲書院」は浅井中学校から浅井町歴史民俗資料館（現浅井歴史民俗資料館）へ移管された。

「八雲書院」の資料は、浅井中学校や郷土史研究家らによって昭和 56 年（1981）に整理がされていたが、その時点で資料の欠番が存在していた。また、その後に資料の追加などもあり、寄贈時の目録（『八雲書院蔵品目録』、以下『目録』）と資料内容などの不一致が生じていたことから、筆者らが再整理を行うこととした。この整理は、現段階における『目録』の作成を目的としている。

田中氏が収集した資料は、滋賀県内だけではなく、京都府、奈良県、大阪府、北海道など広範囲におよび、出土地など当時の情報をほぼ明確に示している。

収集資料のうち、本稿で扱う瓦は、古代寺院や城郭・神社などにおける、古代から近世・近代まで幅広い時代のものが採集されている。また、地域としては地元の浅井郡のみならず、田中氏が奉職していた、高穴穂神社のある大津市や他府県、中国など幅広い地域におよぶ。

本稿では、収集資料のうち「長浜市八雲書院資料調査報告＜瓦編 1＞」（古山・福井 2022）に引き続き、瓦（『目録』の No. 81 ～ 120）を中心に整理を行い、その成果について報告する。なお、瓦資料については 165 点あり、本稿ではそのうち 66 点について報告する。

——— キーワード

白鳳時代 奈良時代 平安時代 鎌倉時代 安土桃山時代 江戸時代 八雲書院 田中礎 丸瓦 平瓦

1. はじめに

「八雲書院」は浅井郡田根村大字上野（現長浜市上野町）出身の田中礎氏が収集した考古資料一式のことである。田中氏は昭和27年（1952）に「郷土史研究に役立ててほしい」という思いから、資料一式を浅井町立浅井中学校（現長浜市立浅井中学校）に寄贈した。その後、旧浅井町で資料館が設置されたことに伴い、平成6年（1994）に、資料群は浅井町歴史民俗資料館（現浅井歴史民俗資料館）に移管された。

寄贈後70年を経過し、寄贈時に作成された『八雲書院蔵品目録』（浅井中学校1952、以下『目録』）と収納されている遺物との齟齬が生じていること、採集地なども記録が当時のままで現在と異なっているものもあることから、令和3年度より筆者らが資料の再整理及び現段階での目録の作成を行うこととした。

本稿は2ヶ年目の調査報告となり、本年度は福井と山田梨紗子（滋賀県立大学人間文化学部地域文化学科3回生）が調査を行った。

2. 採集瓦について

以下のaは前稿の補遺、b～yは『目録』の記載順に則る。『目録』記載事項に訂正がある場合は随時本文中に記載する。また、未報告の瓦資料は125点あり、前稿（古山・福井2022、1～40）に引き続き、41～165の資料番号を新たに付番し、本稿では41～106までの66点を報告する（表1）。

瓦の部分名称は、軒瓦については『木村捷三郎収集瓦図録』（財団法人京都市埋蔵文化財研究所1996、以下『木村図録』）の「第三章 収集資料の概要 1. 資料観察の基準」、丸瓦については「研究ノート 丸瓦の製作技術」（大脇1991）、平瓦については「平瓦桶巻作り」（佐原1972）、方形平瓦については『穴太遺跡発掘調査報告書Ⅳ』（滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会2001）p.319の「方形平瓦についての参考図」に準拠する。

また、本章の記述は『目録』掲載順の採集地ごとに記載し、①は採集地の概要を、②は採集瓦の概要・注記、観察事項、その他特記事項を記載している。採集地の概要は、前稿掲載分については前稿を参照いただきたい。なお、採集地の概要は特に出典がない場合は『滋賀県の地名』（平凡社地方資料センター編1991）及び『日本史広辞典』（日本史広辞典編集委員会編1997）に拠った。また資料の色調は『新版標準土色帖（36版）』（小山・竹原2014）に拠った。

a. 軒瓦・鬼瓦補遺（図1-41・42、写真図版1-41・42）

①概要

本項目では前稿で調査漏れとなっていた軒平瓦（41）と鬼瓦（42）について述べる。なおこれらには『目録』番号

や採集地の記載はない。

②採集瓦

41 均整唐草文軒平瓦である。墨書等はない。

残存する瓦当面厚は3.1cmで、0.5cmの外縁をもつ。外区と内区の間には圈線が巡り、内区の唐草文帯は上下反転しながら連続する唐草を配し、各唐草には子枝がつく。灰白色を呈し、焼成は良、胎土はやや粗である。奈良時代。

類例として、『水谷隆信収集資料図録』（滋賀県ミュージアム活性化推進委員会2019）掲載の内裏野廃寺（甲賀寺跡）採集の142や採集地不明の唐草文軒平瓦204～206・208・209・220、『木村図録』掲載の甲賀寺跡（紫香楽宮跡）採集の1246、『近江の古代寺院』（小笠原・田中・西田・林1989）甲賀寺跡の項掲載のⅡ型式の軒平瓦（第12図13・14、第13図KH05（恭仁宮・山城国分寺跡）、図版121の13～16）などが挙げられる。この型式の軒平瓦は、紫香楽宮内裏野地区（内裏野廃寺）の講堂周辺で多く採取され、出土量が最も多い型式となっている（鈴木2019）。田中氏も紫香楽宮跡（内裏野廃寺か）での瓦採集を行っており（本稿「u. 103 甲賀郡信楽宮跡」）、その際に収集された瓦だと推定される。

42 鬼瓦である。墨書等はない。

文様はなく、平面的な鬼瓦である。切据鬼の一部と考えられる。裏面にはカキヤブリが施されている。表面はナデ調整がされており、表面端部は面取りがされている。暗青灰色を呈し、焼成は堅緻、胎土は良である。近代か。

b. 81 奈良県東大寺（図1-43、写真図版1-43）

①概要

奈良市雑司町に所在する寺院で、南都七大寺のひとつ。前身は聖武天皇が基王の菩提を弔うために建てたと伝わる金鐘寺という。紫香楽宮で始まっていた大仏造営が、天平17年（745）の平城遷都に伴って、金鐘寺の寺地で継続され、天平勝宝4年（752）に大仏開眼供養が行われた。治承4年（1180）や永禄10年（1567）に兵火に遭い大仏殿などが消失したが、その都度再建され、現在に至る。

②採集瓦

43 丸瓦である。凹面に「大和／唐招提寺」と朱書されている。『目録』「83 奈良県唐招提寺」と入れ替わっており、『目録』記載ミスと考えられる。

丸瓦の頭端部から胴部で、右側面部が残る。凸面は縄叩きのち縦ナデ、凹面には布目痕が残る。凸面は横ナデ、凹面側縁部、頭端面と右側面はヘラケズリがされる。灰色を呈し、焼成は良、胎土は良である。奈良時代。

c. 82 奈良県正倉院（図1-44、写真図版1-44）

①概要

奈良市雑司町の東大寺に所在する高床式倉庫である。築造の記録はないものの、天平宝字3年（759）以前には存

表１ 『八雲書院蔵品目録』『田中礎コレクション目録』対応表

八雲書院蔵品目録				田中礎コレクション目録				瓦編１	本稿
No.	品目	採集地	備考	No.	品目	採集地	備考	資料No.	資料No.
81	古瓦	奈良県東大寺		欠番					43
82	古瓦	奈良県正倉院		欠番					44
83	古瓦	奈良県唐招提寺		欠番					45、46
84	陶棺	唐招提寺		欠番					
85	古瓦	京都市伏見桃山城		85	古瓦	伏見区桃山城	金泥が塗ってある	1	47
86	古瓦	蒲生郡安土城跡	金泥がみられる	欠番				2	48～53
87	古瓦	京都府下丹波周山密厳寺址		欠番					54～56
88	古瓦	愛知県犬山城		欠番					57、58
89	古瓦	中国蘇州寒山寺		欠番					59
90	古瓦	奈良県橘寺		欠番					60
91	古瓦	奈良県薬師寺		91	古瓦	奈良県薬師寺			61、62
92	古瓦	彦根城		欠番				3、4	63
93	古瓦	長浜城址		欠番					64～67
94	古瓦	大津市膳所城址		欠番				5、6	68
95	花筒			欠番					
96	古代の煉瓦	長浜市六荘町		96	古代の煉瓦	長浜市六荘町			
97	古瓦	栗田郡在原寺		97	古瓦	在原寺			69
98	古瓦	湯田村八島救外寺址		欠番				7	70～72
99	古瓦	京都市南禅寺		欠番					73
100	古瓦	京都市嵯峨天竜寺		100	古瓦	京都市天竜寺			74
101	古瓦	京都市下加茂神社旧神宮寺跡		欠番				8	75、76
102	古瓦	甲賀郡下田上村		102	古瓦	栗太郡下田上			77、78
103	古瓦	甲賀郡信楽宮址		103	古瓦	甲賀郡信楽宮			79～81
104	古瓦	仰木村幸神地		104	古瓦	滋賀郡仰木村草神地		9	
105	経筒	比叡山横川如法塔附近		欠番					
106	古瓦	大津市石山寺辺国分寺		欠番				10～12	82～90
107	古瓦	大津市瀬田町三大寺		欠番				13	91～95
108	古瓦	蒲生郡総見寺		欠番				14、15	
109	古瓦	大津市坂本町滋原		欠番					96
110	古瓦	犬上郡高宮町		欠番				16	
111	古瓦	大津市坂本町穴太城址		欠番				17	97～106
112	古瓦	大津市坂本町崇福寺		112	古瓦	大津市崇福寺		18	
113	古瓦	大津市坂本町彦根堂		欠番				19	
114	古瓦	大津市園城寺		114	古瓦	大津市園城寺			
115	古瓦	大津市比叡山宝幢院		115	古瓦	大津市比叡山宝幢院			
116	古瓦	大津市坂本町生源寺		欠番					
117	古瓦	大津市大津宮		117	古瓦	大津市大津宮		20～29	
118	古瓦	大津市坂本城址		欠番					
119	古瓦	大津市坂本梶井寺址		欠番					
120	古瓦	滋賀郡堅田町衣川寺		欠番					
記載なし				記載なし				30～40	41、42

※No.については『八雲書院蔵品目録』の番号を採用している。『田中礎コレクション目録』の番号も『八雲書院蔵品目録』に準拠している。

※表は本稿が瓦を中心に報告をしていることから、『八雲書院蔵品目録』・『田中礎コレクション目録』の瓦に関わる部分（No. 81～No. 120）のみ抜粋している。

※本稿では、No. 81～No. 111までの平瓦・丸瓦を中心に報告しているため、扱っていない項目がある。

※『八雲書院蔵品目録』は浅井中学校(1952)を、『田中礎コレクション目録』は粕渕(2000)を基に作成。

在していたという。天平勝宝 8 年（756）に聖武太上天皇が崩御し、遺愛の品々を光明皇太后が東大寺正倉に収蔵したものが現在まで続く、東大寺正倉院の嚆矢となった。

②採集瓦

44 平瓦である。凹面に「正倉院」と墨書されている。

平瓦の体部で、端部は残存していない。凹凸両面とも摩滅著しいが、凸面には格子叩き痕が残る。淡黄色を呈し、焼成は良、胎土は精良である。白鳳時代～奈良時代。

d. 83 奈良県唐招提寺

（図 1-45・46、写真図版 1-45・46）

①概要

奈良市五条町に所在する寺院で、南都十五大寺のひとつ。鑑真によって天平宝字 3 年に建立された。弘仁 3 年（812）以降に荒廃していくが、寛元 2 年（1244）に覚盛が入寺して中興した。講堂・金堂・宝蔵・経蔵など修理や改造がされているものもあるが、奈良時代の建築が残る。

②採集瓦

いずれも墨書で「奈良県東大寺」と記され、『目録』「81 奈良県東大寺」と入れ替わっており、『目録』記載ミスと考えられる。

45 丸瓦である。凸面に「三個ノ一／昭和十五、三月十九日／奈良県東大寺／西門瓦片」と墨書されている。

丸瓦の胴部で、左側面部が残る。凸面は摩滅著しいが縦ナデ、凹面には目の粗い布目痕と糸切痕が残る。また、凹面頭部側に横方向のヘラケズリ、凹面側縁部、側面はヘラケズリがされる。にぶい黄橙色を呈し、焼成は良、胎土はやや粗である。平安時代後期。

46 平瓦である。凹面に「三個ノ一、一／奈良県東大寺／西門瓦片」と墨書されている。

平瓦の体部で、端部は残存していない。凹面は縦ナデ痕、凸面は縦ナデ痕と叩き痕が残る。叩き板は菱形や三角形などが混じる板のようである。浅黄色を呈し、焼成は良、胎土は良であるが砂が混じる。鎌倉時代。

45・46 の注記から元は 3 点採集されていたものの、1 点は散逸したようである。

e. 85 京都市伏見桃山城（図 1-47、写真図版 1-47）

①概要

前稿「a. 85 京都市伏見桃山城」の項参照。

②採集瓦

47 丸瓦である。墨書等はない。

丸瓦の頭端部から胴部で、右側面部が残る。凹凸両面とも摩滅著しいが、凹面にコビキ B と考えられる痕跡がある。また、凹面側縁部は面取りが、頭端面と側面はヘラケズリがされる。灰色を呈し、焼成は良、胎土は良である。安土桃山時代。

f. 86 蒲生郡安土城跡

（図 1-48～53、写真図版 1-48～53）

①概要

前稿「b. 86 蒲生郡安土城」の項参照。

②採集瓦

48 丸瓦で、赤瓦である。凸面に「昭和十六 五月／安土城址／発見」と墨書されている。

丸瓦の胴部で、左側面部が残る。凸面は縦位のヘラケズリ、凹面はヘラケズリがされ、粘土貼付の痕跡がある。側面はヘラケズリがされる。にぶい褐色を呈し、焼成は堅緻、胎土は精良である。安土桃山時代。

49 丸瓦である。凸面に「安土城址」と白色で記される。

丸瓦の胴部で、端部は残存していない。全体が被熱により赤変および歪んでいる。凸面は縦位のヘラケズリがされる。凹面には布目痕が残る、側縁部にはヘラケズリがされる。にぶい赤褐色、褐灰色を呈し、焼成は堅緻、胎土は精良である。安土桃山時代。

50 丸瓦である。凸面に「天字刻／昭和十六年五月九日／安土城天守閣拾収」と墨書されている。

丸瓦の胴部で、左側面部が残る。凸面は縦位のヘラケズリがされ、凹面には布目痕、吊紐痕、内叩き痕が残る、引っ掛けをつけるためのカキヤブリがある。側縁部に面取りが、側面はヘラケズリがされる。灰色を呈し、焼成は堅緻、胎土は精良である。安土桃山時代。

51 丸瓦である。凸面に「昭和十六年五月九日／安土城ニテ」と墨書されている。

丸瓦の頭端部から胴部で、右側面部が残る。凸面は縄叩きのち縦位のヘラケズリがされ、凹面は布目痕と内叩き痕が残る。凹面頭端縁部、側縁部は面取りが、頭端面、側面はヘラケズリがされる。灰色を呈し、焼成は堅緻、胎土は精良である。安土桃山時代。

52 丸瓦である。凸面に「昭和十六年五月九日／安土城三ノ丸」、凹面に「三ノ丸刻」とそれぞれ墨書されている。

丸瓦の胴部で、端部は残存していない。凸面は縄叩きのち縦位のヘラケズリがされる。凹面はコビキ A、布目痕、吊紐痕が残る。灰色を呈し、焼成は堅緻、胎土は精良である。安土桃山時代。

53 丸瓦である。墨書等はない。

丸瓦の胴部で、右側面部が残る。凸面は縦位のヘラケズリがされ、凹面は布目痕が残る。凹面側縁部は面取りが、端面はヘラケズリがされる。灰白色を呈し、焼成は良、胎土は良である。安土桃山時代。

前稿分の総見寺採集瓦 14・15 と 48・50～52 はいずれも昭和 16 年（1941）5 月（9 日）採集と記される一群となる。

g. 87 京都府下丹波周山密厳寺址

（図 1-54～56、写真図版 1-54・55、写真図版 2-56）

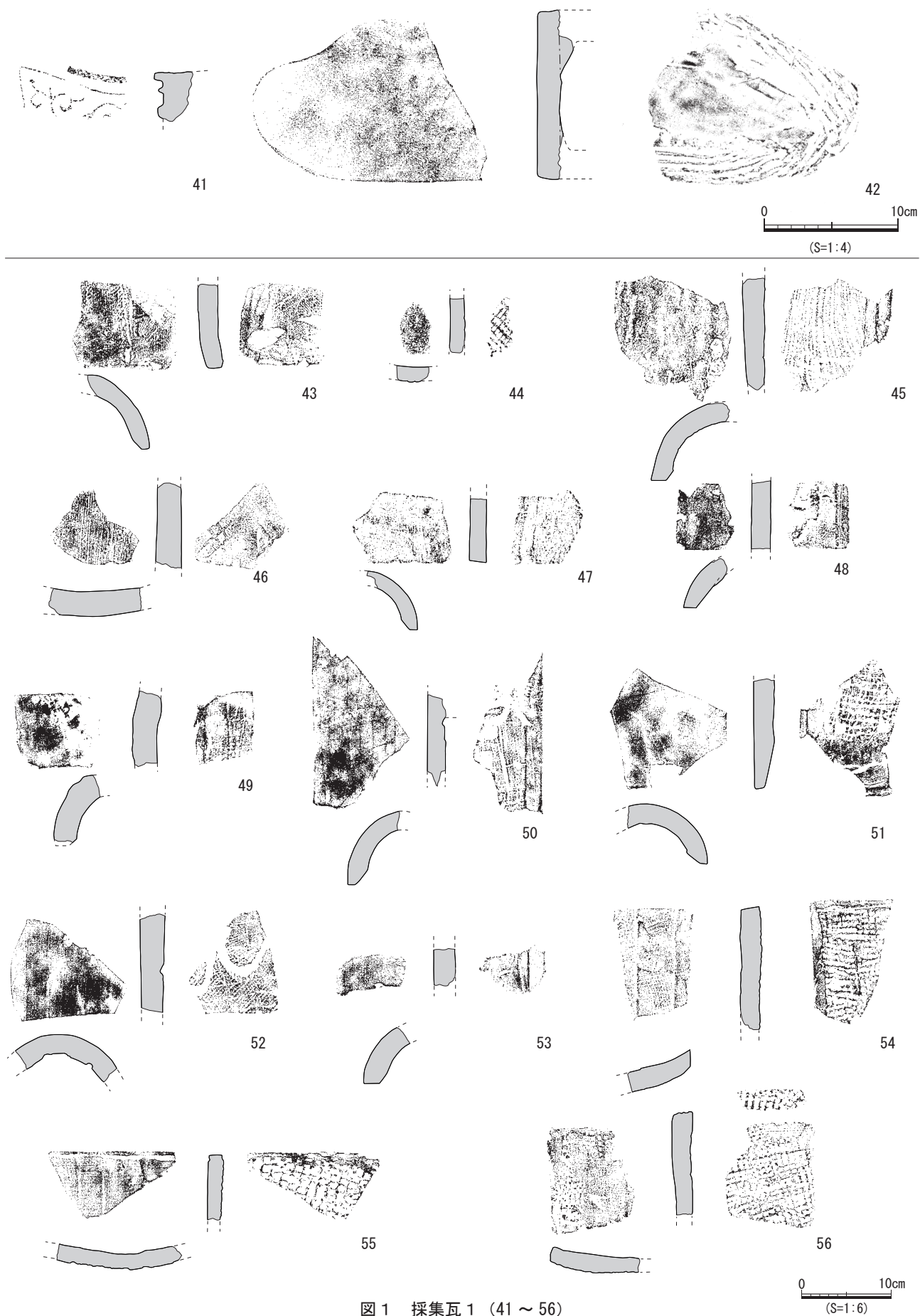


図 1 採集瓦 1 (41 ~ 56)

①概要

京都市右京区京北に所在する周山廃寺と考えられる。周山廃寺は昭和22・24年（1947・1949）に発掘調査が行われている。伽藍配置は東堂・塔・中堂・北堂・南門・西堂と仮称され、うち、北堂・南門以外は発掘調査により建物跡が確認されており、7世紀後半創建と考えられている（京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課2010）。

②採集瓦

54 平瓦である。凹面に「丹波国周山／密厳寺址／昭和十一、七、十七」と墨書されている。

平瓦の体部から広端部で、右側面部が残る。凹面には布目痕と模骨痕が残る。凸面には格子叩き痕が残る。また凸面側縁部と広端縁部は面取りがされ、側面、端面ともにヘラケズリがされる。灰黄色を呈し、焼成は堅緻、胎土は良である。白鳳時代。

55 平瓦である。凹面に「丹波国周山／密厳寺址」と墨書されている。

平瓦の広端部で、側面部は残存していない。凹面には布目痕と模骨痕が残る。凸面には格子叩き痕が残り、端面はヘラケズリがされる。灰白色を呈し、焼成は堅緻、胎土は良である。白鳳時代。

56 平瓦である。凹面に「丹波国周山／密厳寺址」と墨書されている。

平瓦の体部から広端部で、左側面部が残る。凹面には布目痕と模骨痕が残り、一部箇所には格子叩きがされている。凸面は格子叩き痕が残り、広端縁部には横ナデがされる。広端面は格子叩き痕が残る。凹面と広端面に叩きがあることから、粘土板の重ね合わせ部分を補強のため叩いたものとみられる。側面は模骨につけられた円筒分割用の突帯の痕跡が残り、ヘラケズリがされる。灰白色を呈し、焼成は堅緻、胎土は良である。白鳳時代。

h. 88 愛知県犬山城（図2-57・58、写真図版2-57・58）

①概要

愛知県犬山市に所在する近世城郭である。天文6年（1537）に織田信康によって築城されたと伝わる。慶長12年（1607）に徳川義直が清洲藩主になると付家老の平岩親吉、ついで成瀬正成が入り、以降成瀬氏が代々城主を継ぎ幕末を迎える。天守閣は慶長年間に改修されたものが残る。

②採集瓦

57 丸瓦である。凸面に「尾張 二ノ内／犬山城瓦片」と墨書されている。

丸瓦の胴部から玉縁部で、両側面部と玉縁端部が残る。凸面は縦位のヘラケズリと縦ナデがされ、凸面玉縁部はナデ調整がされる。凹面はコビキBと布目痕が残り、側縁部には面取りが、側面はヘラケズリがされる。玉縁端部から8.5cmの位置に、径1.4～1.6cmの釘穴がつけられている。黄灰色を呈し、焼成は良、胎土は良である。江戸時代。

58 丸瓦である。凸面に「犬山城瓦／二ノ内」と墨書されている。

丸瓦の頭端部から胴部で、右側面部が残る。凸面は縦位のヘラケズリがされ、凹面はコビキBと布目痕が残り、頭端縁部と側縁部は面取りが、端面と側面はヘラケズリがされる。灰色を呈し、焼成は良、胎土は良である。江戸時代。

i. 89 中国蘇州寒山寺（図2-59、写真図版2-59）

①概要

寒山寺は中国江蘇省蘇州市に所在する寺院である。梁の武帝の天監年間（502～519）に創建されたといわれ、伽藍の創建は8世紀から9世紀頃にかけてと伝えられる。中唐の政治家である張継が詠んだ「楓橋夜泊」の石碑がある。

②採集瓦

59 磚と考えられる。一面に「志那蘓州／寒山寺古瓦／西岡氏寄送」と墨書されている。

最大長12.2cm、幅11.5cm、厚さ3.6cmである。厚さ1.9cmと1.7cmの粘土を重ねて成型している。全体的に摩滅・剥離が著しいが、長辺方向に向かってナデ調整をしているようである。側面はヘラケズリがされている。灰白色を呈し、焼成は堅緻、胎土は精良である。時期不詳。

j. 90 奈良県橘寺（図2-60、写真図版2-60）

①概要

高市郡明日香村に所在する寺院である。厩戸皇子誕生の地に皇子が建立したとも、推古14年（606）に皇子の「勝鬘經」の講説の賞として建立したとも伝わる。当初は四天王寺式の伽藍配置であったが、天武9年（680）以降、度々火災に遭い、現在の伽藍は幕末期以降のものである。

②採集瓦

60 丸瓦である。凸面に「大和橘寺古瓦／昭和十四年（〇〇）年／五月十一日」と墨書されている。

丸瓦の頭端部から胴部で、左側面部が残る。凹凸両面ともに摩滅著しいが、凸面は縦横両方向への板ナデ、凹面は縦ナデがされている。凹面頭端縁部と側縁部には面取りが、端面と側面はヘラケズリがされる。頭端から6.1cmの位置に釘穴がつけられている。灰色を呈し、焼成は良、胎土はやや粗である。平安時代～鎌倉時代か。

k. 91 奈良県薬師寺（図2-61・62、写真図版2-61・62）

①概要

奈良市西ノ京町に所在する寺院で、南都七大寺のひとつ。天武9年に天武天皇が鸕野讃良皇后（のちの持統天皇）の病氣平癒を願い発願し、文武2年（698）にほぼ完成した。これが本薬師寺（橿原市城殿）である。養老2年（718）、平城遷都に伴い、現在地に移転した。天延元年（973）以降、度々火災や兵火に遭うがその都度再建され、現在に至る。

②採集瓦

61 丸瓦である。凸面に「大正十三、(〇〇)／大和薬師(寺カ)／(古瓦カ)」と墨書されている。

丸瓦の胴部から玉縁接合部で、右側面部が残る。凹凸両面とも摩滅著しく、調整は不明である。にぶい橙色を呈し、焼成は良、胎土は良である。奈良時代。

62 丸瓦である。凸面に「大和薬師寺／古瓦」と墨書されている。

丸瓦の頭端部から胴部で、左側面部が残る。凸面は縦位の縄叩きのち横ナデがされ、凹面には布目痕が残る。側面はヘラケズリがされる。灰色を呈し、焼成は堅緻、胎土は精良である。奈良時代。

1. 92 彦根城（図2-63、写真図版2-63）

①概要

前稿「c. 92 彦根城」の項参照。

②採集瓦

63 丸瓦である。凸面に「彦根城（8）」と墨書で記された紙が貼付されている。

丸瓦の頭部から胴部で、右側面部が残る。凹凸両面とも摩滅著しいが、凸面は縦位のヘラケズリがされ、凹面にはコビキBが残る。頭端縁部と側縁部は面取りがされ、側面はヘラケズリがされる。頭端面は欠損している。灰色を呈し、焼成は良、胎土は良である。江戸時代。

彦根城収集瓦は前稿分（3・4）も含めて3点で、いずれも「彦根城（数字）」と書かれた紙が貼付されている。この数字から、元は8点以上あったものと推測され、残り5点は散逸したようである。日付が記されるものは4の「昭和十一年（1936）10月4日」のみであるが、注記方法から同時期の採集だと考えられる。

m. 93 長浜城址（図2-64～67、写真図版2-64～67）

①概要

長浜市公園町に所在する城郭跡である。天正2年（1574）に羽柴秀吉によって築城された。のち、柴田勝豊、山内一豊が城主となる。慶長11年（1606）に内藤信成が入るが、元和元年（1615）には彦根藩領となり廃城となった。城跡の一部は豊公園や長浜城歴史博物館となっている。琵琶湖底や湖岸に石垣が残る。

②採集瓦

64 丸瓦である。凸面に「昭和十五年一月五日／豊公長浜城址」と墨書され、また「昭和十五年（一月五日／豊公長浜城址拾得カ）」と書かれた紙が貼付されている。

丸瓦の胴部から玉縁端部で、右側面部が残る。凸面は縄叩きのち縦位のヘラケズリがされ、凹面は布目痕と吊紐痕が残る。凹面側縁部から端面はヘラケズリが、玉縁凸面は横ナデがされる。灰色を呈し、焼成は堅緻、胎土は良である。安土桃山時代。

65 丸瓦である。凸面に「昭和十五年一月五日／長浜城

址瓦片」と墨書され、また判読不能の文字が記載された紙が貼付されている。

丸瓦の頭端部から胴部で、左側面部が残る。凸面は縦位のヘラケズリがされ、凹面は布目痕と吊紐痕が残る。凹面頭端縁部と側縁部から端面はヘラケズリがされる。黒褐色を呈し、焼成は堅緻、胎土は良である。安土桃山時代。

66 丸瓦である。凸面に判読不能の文字が記載された紙が貼付され、また「昭和十五年一月五日／豊公長浜城址」と墨書されている。

丸瓦の胴部から玉縁接合部で、左側面部が残る。凹凸両面とも摩滅・剥離が著しいが、凸面は縦位のヘラケズリがされ、凹面は布目痕が残る。凹面側縁部から端面はヘラケズリがされる。暗灰色を呈し、焼成は良、胎土は良である。安土桃山時代。

67 丸瓦である。凸面に「昭和十（五カ）年一月五日／豊（公長浜城址カ）拾得」と書かれた紙が貼付されている。

丸瓦の頭端部から胴部で、左側面部が残る。凸面は縦位のヘラケズリがされ、凹面は布目痕が残る。凹面頭端縁部および側縁部から端面はヘラケズリがされる。灰色を呈し、焼成は堅緻、胎土は良である。安土桃山時代。

n. 94 大津市膳所城趾（図2-68、写真図版2-68）

①概要

前稿「d. 94 大津市膳所城趾」の項参照。

②採集瓦

68 丸瓦である。凸面に「昭十五、二、二十七日／膳所城」と墨書されている。

丸瓦の胴部から玉縁接合部で、右側面部が残る。凸面は縦位のヘラケズリがされ、凹面には布目痕が残る。凹面側縁部は面取りが、端面はヘラケズリがされる。灰色を呈し、焼成は堅緻、胎土はやや粗である。江戸時代。

前稿の膳所城収集瓦（5・6）は膳所町の本多氏より譲ってもらったもの（「膳所城古瓦／全町本多氏寄送」）である一方、68は田中氏が現地で採集したものと考えられる。

o. 97 栗田郡在原寺（図2-69、写真図版2-69）

①概要

『近江輿地志略』（寒川1734）にその名が見られる寺院跡である。「在原寺」自体はよくわかっていないが、本稿「t. 102 甲賀郡下田上村」採集の瓦の注記にも「在原寺」の記載があることから、栗太郡下田上村（現大津市田上石居町）に所在する石居廃寺と考えられる。石居という地名は、当地に在原業平が石を据えたという伝承から、慶長7年（1602）に膳所藩主の戸田一西によって名付けられたと伝わる。石居廃寺は白鳳時代に創建され、平安時代頃までは存続していたという。

②採集瓦

69 丸瓦である。凸面に「栗太郡／在原寺」と朱書され

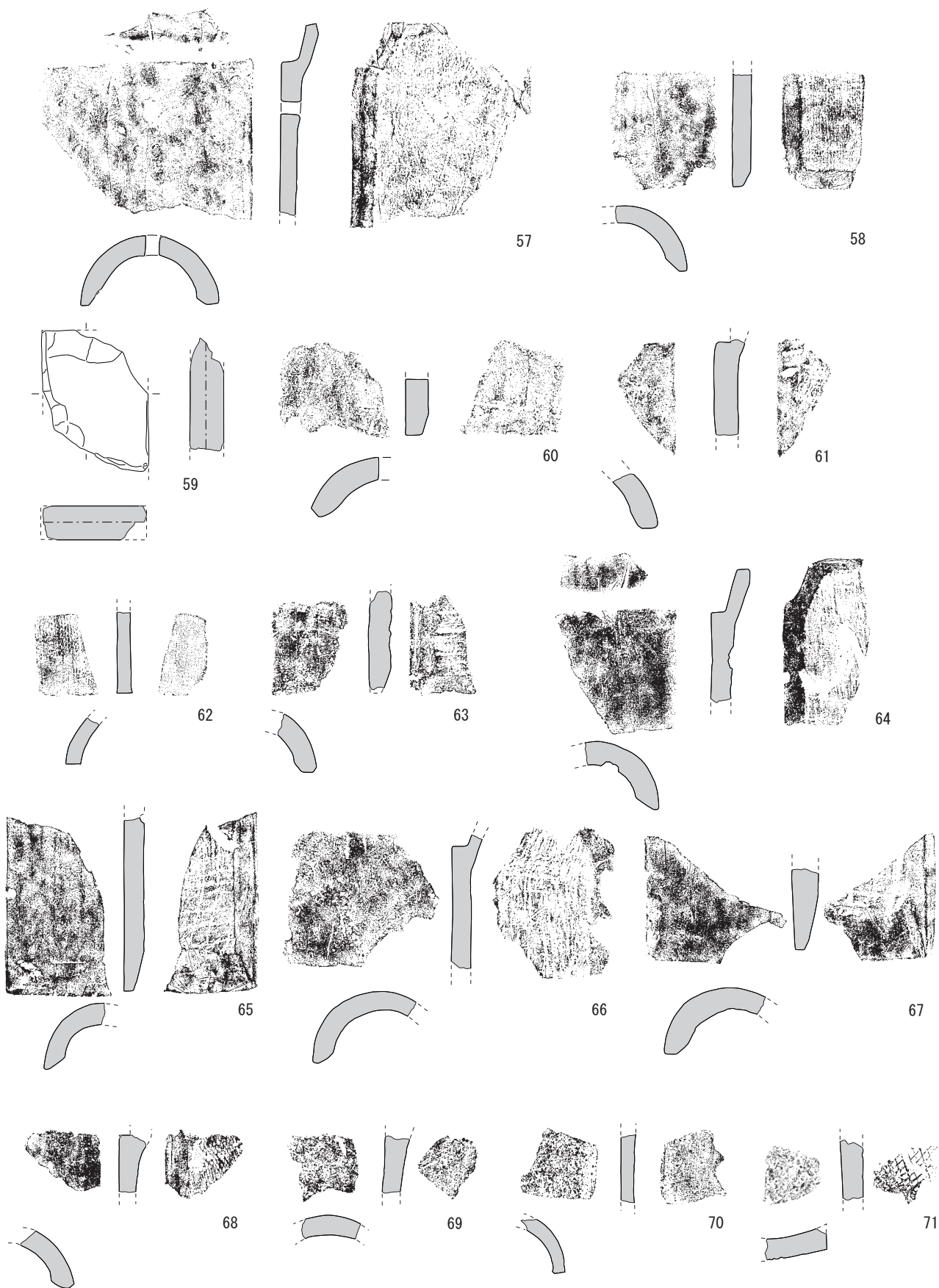


図 2 採集瓦 2 (57 ~ 72)

0 10cm
(S=1:6)

ている。

丸瓦の胴部で、端部は残存していない。凸面は摩滅・剥離が著しいが、縦位のヘラケズリがされているようである。凹面には糸切痕と布目痕が残る。黄灰色を呈し、焼成は良、胎土は良である。奈良時代か。

p. 98 湯田村八島救外寺趾

（図2-70・71、図3-72、写真図版2-70～72）

①概要

前稿「e. 98 湯田村八島救外寺趾」の項参照。

②採集瓦

70 丸瓦である。凸面に「昭和十四年／九月十四日収／救外寺趾／五ノ一」と墨書されている。

丸瓦の胴部で、右側面部が残る。凸面は縦ナデがされ、一部に自然釉がかかっている。凹面は布目痕が残る。側縁部はわずかに面取りが、側面はヘラケズリがされる。灰色を呈し、焼成は堅緻、胎土はやや粗である。白鳳時代。

71 平瓦である。凹面に「五ノ一／昭和十四年／九月十四日／救外寺趾」と墨書されている。

平瓦の体部で、右側面部が残る。凹面は布目痕が残る、側縁部はナデ調整がされる。凸面には格子叩き痕が残る。側面はヘラケズリがされる。灰白色を呈し、焼成は堅緻、胎土は良である。白鳳時代。

72 平瓦である。凸面に「五ノ一／昭和十四年九、一四／救外寺趾」と墨書されている。

平瓦の狭端部から体部で、側面部は残存していない。凹面は布目痕と模骨痕と考えられる痕跡が残る。凸面は摩滅著しいが、格子叩き痕がわずかに残る。凹面狭端縁部は面取りがされ、端面はヘラケズリがされる。灰白色を呈し、焼成はやや不良、胎土はやや粗である。白鳳時代。

八島救外寺採集の瓦は前稿分（7）も含めて4点あり、いずれも「五（個）ノ一」と記されることから、1点は散逸しているようである。注記がないものに八島廃寺採集（35・36）と考えられる八島瓦窯系の重圈文縁単弁蓮華文軒丸瓦があるので、どちらかを含めて5点だったのかもしれない。

q. 99 京都市南禅寺（図3-73、写真図版2-73）

①概要

京都市左京区に所在する寺院である。元は龜山天皇が母大宮院のための離宮である禅林寺殿として文永元年（1264）に造営したものであるが、正応4年（1291）に禅寺と改め、竜安山禅林禅寺としたのが始まりという。14世紀初めに南禅寺という名称となる。応仁元年（1467）に兵火に遭い全山焼失したが、再建されている。

②採集瓦

73 平瓦である。凸面に「昭和二十三年／十一月十日拾取／南禅寺／古瓦」と墨書されている。

平瓦の体部で、左側面部が残る。凹面は糸切痕が残る、側面から3.2cm程度まではヘラケズリがされる。凸面は縦位の縄叩き痕と側面から3.9cmまではナデと考えられる痕跡がある。凹面側縁部は面取りがされ、側面はヘラケズリがされる。灰白色を呈し、焼成は良、胎土はやや粗である。鎌倉時代か。

瓦資料のうち、注記があるものでは唯一の第二次世界大戦後に収集されたものである。

r. 100 京都市嵯峨天竜寺（図3-74、写真図版2-74）

①概要

京都市右京区にある寺院である。足利尊氏・直義が後醍醐天皇の菩提を弔うために暦応2／延元4年（1339）から建立される。寺地は、元は嵯峨天皇皇后の橘嘉智子が承和年間（834～848）に営んだ檀林寺跡で、のちに後嵯峨法皇が龜山殿を造営し、後醍醐天皇が相続していた。

②採集瓦

74 平瓦である。『目録』によると天竜寺採集となっているが、墨書等はない。

平瓦の体部で、端部は残存していない。凹面は模骨痕と布目痕が残る、凸面は格子叩き痕が残る。灰白色を呈し、焼成は良、胎土はやや粗である。白鳳時代。

天竜寺は足利尊氏が後醍醐天皇の菩提を弔うために室町時代初期に建立した寺院であるため、当資料は天竜寺に伴うものではなく、また、桶巻作りで作られた瓦であることから、平安時代の檀林寺に伴うものでもない。資料自体に注記がされていないことから、現状では採集地不明とせざるを得ない。

s. 101 京都市下加茂神社旧神宮寺跡

（図3-75・76、写真図版2-75・76）

①概要

前稿「f. 101 京都市下加茂神社旧神宮寺跡」の項参照。

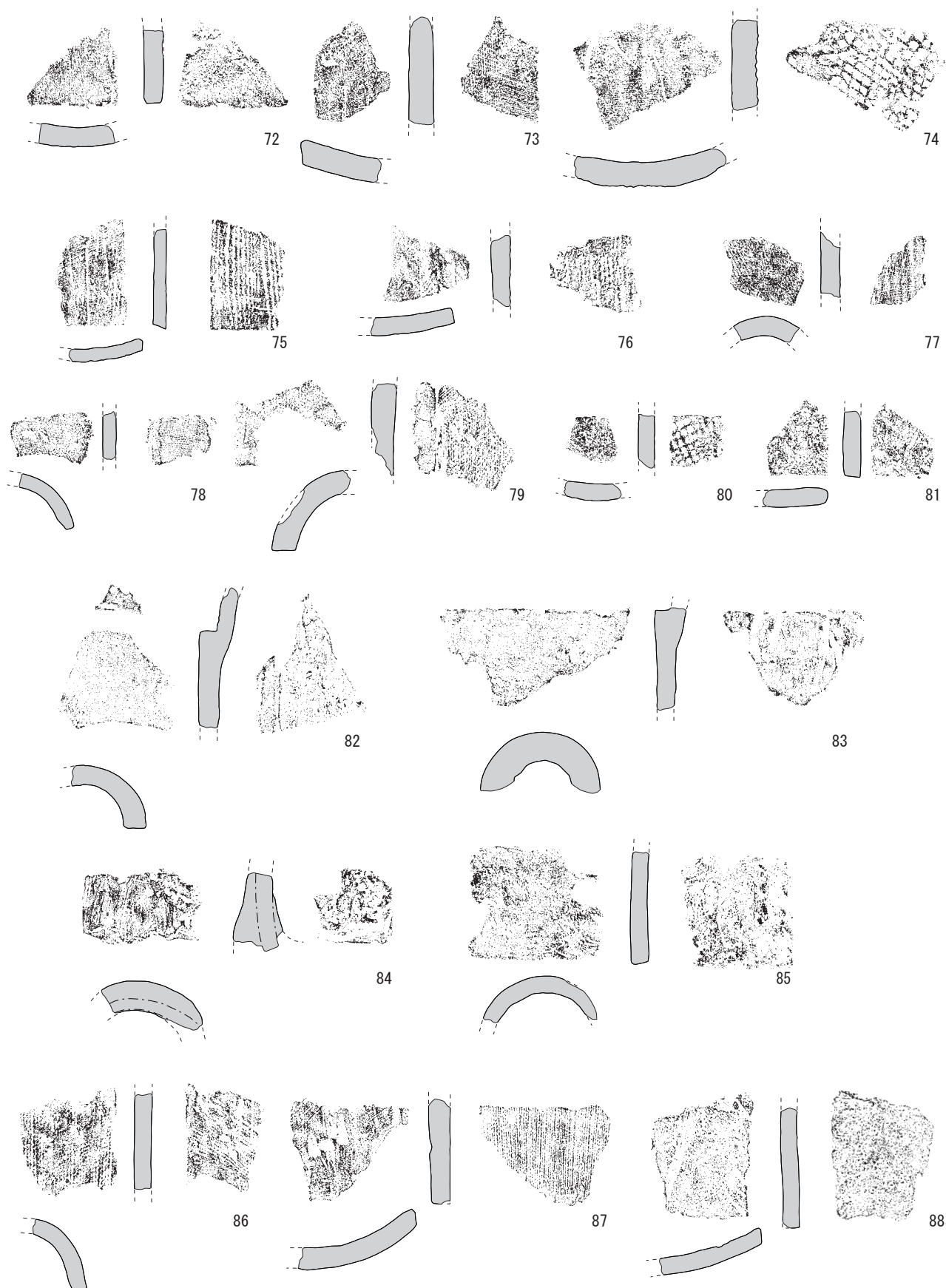
②採集瓦

75 平瓦である。凹面に「昭和十七年十一月二日／下加茂神社／採取」と墨書されている。

平瓦の狭端部から体部で、左側面部が残る。凹面は糸切痕と模骨痕が、凸面には縦位の縄叩き痕が残る。凹面側縁部は面取りがされ、端面はヘラケズリがされる。狭端面はやや斜めにヘラケズリがされている。灰白色を呈し、焼成は良、胎土は良である。白鳳時代～奈良時代。

76 平瓦である。凹面に「下加茂神社／昭和十七年十一月二日」と墨書されている。

平瓦の体部で、右側面部が残る。凹面は摩滅著しいが、模骨痕と考えられる痕跡が、凸面は縦位の縄叩き痕が残る。側面部はヘラケズリがされる。淡黄色を呈し、焼成は良、胎土は良である。白鳳時代～奈良時代。



0 10cm
(S=1:6)

図3 採集瓦 3 (73 ~ 88)

t. 102 甲賀郡下田上村

(図3-77・78、写真図版2-77・78)

①概要

旧栗太郡下田上村で、注記から現大津市田上石居町である。『目録』の甲賀郡は誤記であろう。瓦に「在原寺」と記されることから、いずれも在原寺（石居廃寺）で採集されたものと考えられる。石居廃寺については本稿「o. 97 栗田郡在原寺」を参照。

②採集瓦

77 丸瓦である。凸面に「栗太郡／下田上村石居／在原寺」と朱書されている。

丸瓦の胴部で、端部は残存していない。凸面は縄叩き痕と一部横ナデがされる。凹面には布目痕が残る。灰色を呈し、焼成は堅緻、胎土は良である。白鳳時代。

78 丸瓦である。瓦自体には注記ないが、「(栗太カ) 郡／下田上村／在原寺」と朱書された紙札が括り付けられている。

丸瓦の胴部で、右側面部が残る。凸面は摩滅著しい。凹面は布目痕が残る、側縁部は面取りがされる。側面は摩滅しているが、ヘラケズリがされていたとみられる。灰白色を呈し、焼成は良、胎土は良である。白鳳時代。

本稿「o. 97 栗田郡在原寺」採集品を含め、いずれも朱書であることから、同時期に採集されたと考えられる。

u. 103 甲賀郡信楽宮趾

(図3-79～81、写真図版2-79～81)

①概要

『遺跡地図』から、甲賀市信楽町黄瀬・牧に所在する国指定史跡紫香楽宮跡（内裏野廃寺・甲賀寺）と考えられる。紫香楽宮は、天平14年（742）に聖武天皇によって造営が始まり、天平15年（743）には大仏造営の詔が出された。しかし、2年後の天平17年に都が平城京に戻り、紫香楽宮は短期間で廃された。

②採集瓦

79 丸瓦である。左側面に「信楽宮趾」と墨書されている。

丸瓦の胴部で、左側面部が残る。凸面は摩滅・剥離が著しいが、縄叩き痕と側面側に縦位のヘラケズリがされる。凹面は布目痕が残る。側面はヘラケズリがされる。灰白色を呈し、焼成は良、胎土は良である。奈良時代。

80 平瓦である。凹面に「信楽／宮趾」と朱書されている。また、「甲賀（〇〇）／信楽（〇〇）」と墨書された紙が付いている。

平瓦の体部で、端部は残存していない。凹凸両面とも摩滅著しいが、凸面には格子叩き痕が残る。灰白色を呈し、焼成は良、胎土は良である。奈良時代。

81 平瓦である。凹面に「信楽宮趾」と墨書されている。

平瓦の狭端部から体部で、右側面部が残る。凹凸両面とも摩滅著しく、調整は不明である。灰白色を呈し、焼成は

良、胎土は良である。奈良時代。

v. 106 大津市石山町寺辺国分寺 (図3-82～88、

図4-89・90、写真図版2-82～85、写真図版3-86～90)

①概要

前稿「h. 106 大津市石山町寺辺国分寺」の項参照。

②採集瓦

82 丸瓦である。凸面に「近江／国分寺址／五個ノ一」と墨書されている。

丸瓦の胴部から玉縁部で、右側面部が残る。凹凸両面とも摩滅著しく、調整は不明である。凹面側縁部に面取りがされている痕跡がある。浅黄色を呈し、焼成は良、胎土はやや粗である。奈良時代。

83 丸瓦である。凸面に「昭和十二年三月／國分寺址／拾収／五個ノ一」と墨書されている。

丸瓦の胴部から玉縁接合部で、端部は残存していない。凸面は摩滅著しく、調整は不明である。凹面は布目痕が残る。灰白色を呈し、焼成は良、胎土は良である。奈良時代。

84 軒丸瓦である。凹面に「大津宮／国分」と朱書されている。

軒丸瓦の丸瓦頭端部で、側面部は残存していない。凸面は瓦当接合のために粘土が貼付けられ、縄叩きのちヘラケズリがされている。凹面は布目痕が残る、瓦当接合のための粘土が貼付けられ、ナデ調整がされている。丸瓦頭端面はヘラケズリがされる。青灰色を呈し、焼成は堅緻、胎土は良である。奈良時代。

85 丸瓦である。凸面に「近江／国分寺址／五個ノ一」と墨書されている。

丸瓦の頭端部から胴部で、側面部は残存していない。凹凸両面ともに摩滅・剥離が著しく、調整は不明であるが、凹面にわずかに布目痕が残る。灰白色を呈し、焼成はやや不良で、胎土は良である。奈良時代。

86 丸瓦である。凸面に「昭和十四年十月十日／石山寺境内／拾収本堂南側」と墨書されている。

丸瓦の胴部で、右側面部が残る。凸面は縦位の縄叩き痕が残る、凹面は糸切痕と布目痕が残る。凹面側縁部は面取りがされ、端面はヘラケズリがされる。にぶい赤褐色を呈し、焼成はやや不良、胎土は良である。奈良時代。

87 平瓦である。凹面に「大正十四年三月十九日／滋賀郡／石山村国分／採取」と朱書されている。

平瓦の狭端部から体部で、右側面部が残る。凹面は糸切痕と布目痕が残る、棒状の工具で叩いた痕と考えられる窪みが3本ある。凸面は縦位の縄叩き痕が残る。凹面側縁部から側面にかけて、3段にヘラケズリがされる。狭端面はヘラケズリがされる。灰白色を呈し、焼成は堅緻、胎土は良である。奈良時代。

88 平瓦である。凹面に「石山村国分」と朱書されている。

平瓦の体部から広端部で、左側面部が残る。凹面は糸切



図4 採集瓦4（89～97）

0 10cm
(S=1:6)

り痕と布目痕、布袋の綴じ合わせ痕が残り、凸面は縄叩きの横ナデがされる。凹面側縁部と側面、端面はヘラケズリがされる。凹面にはぶい赤褐色、凸面は褐灰色を呈し、焼成は良、胎土はやや粗である。奈良時代。

89 平瓦である。凹面に「近江／国分寺址／五個ノ一」と墨書されている。

平瓦の体部で、左側面部が残る。凹面は布目痕が、凸面は縦位の縄叩き痕が残る。凹面側縁部から凸面側縁部にかけて3段にヘラケズリがされる。淡黄色を呈し、焼成は良、胎土はやや粗である。奈良時代。

90 平瓦である。凹面に「国分寺址／五個ノ一」と墨書されている。

平瓦の狭端部から体部で、右側面部が残る。凹面は摩滅著しいが、布目痕が残り、凸面には縦位の縄叩き痕が残る。凹面側縁部は面取りがされ、端面部はヘラケズリがされる。灰色を呈し、焼成はやや不良、胎土はやや粗である。奈良時代。

82・83・85・89・90はいずれにも「五個ノ一」と墨書されることから昭和12年（1937）3月に一括採集されたようである。また、前稿分（11・12）と87には大正14年（1925）3月19日採集の旨が朱書されており、これらも一括採集となる。84・88は特に日付などの記載はないが、朱書されていることから、大正14年3月19日採集の可能性が高いと考えられる。86は石山寺採集の瓦で、『目録』の「石山寺辺国分寺」は現在の天津市石山寺辺町、天津市国分、天津市石山寺一带を含むと考えられることから、『目録』内ではまとめられたものとみられる。

w. 107 天津市瀬田町三大寺

（図4-91～95、写真図版3-91～95）

①概要

前稿「i. 107 天津市瀬田町三大寺」の項参照。

②採集瓦

91 丸瓦である。凹面に「大正十三、十月、九日／勢田大寺塔址」と朱書されている。

丸瓦の頭端部から胴部で、左側面部が残る。凸面は摩滅著しく、調整は不明である。凹面は糸切痕と布目痕が残る。凹面側縁部と頭端縁部は面取りがされ、端面はいずれもヘラケズリがされる。黄灰色を呈し、焼成はやや不良、胎土はやや粗である。奈良時代。

92 丸瓦である。凸面に「（大正カ）十三、（十カ）、九／セタ／三大寺／（□□）」と朱書されている。

丸瓦の胴部から玉縁端部で、側面部は残存していない。凸面は剥離が著しいが、一部縄叩き痕が残り、凹面には布目痕が残る。玉縁凸面はナデ、端面はヘラケズリがされる。灰色を呈し、焼成はやや不良、胎土はやや粗である。奈良時代。

93 丸瓦である。凹面に「セタ大寺」と朱書されている。

丸瓦の胴部から玉縁部で、左側面部が残存している。凹凸両面ともに摩滅著しいが、凸面は縦位の縄叩き痕が、凹面玉縁部にわずかに布目痕が残る。凹面側縁部はヘラケズリがされる。灰色を呈し、焼成はやや不良、胎土はやや粗である。奈良時代。

94 平瓦である。凹面に「勢田大寺」と墨書されている。

平瓦の体部で、左側面部が残る。凹面は布目痕、凸面は縦位の縄叩き痕が残る。凹面側縁部から凸面側縁部にかけて3段にヘラケズリがされる。灰色を呈し、焼成は良、胎土はやや粗である。奈良時代。

95 平瓦である。凹面に「大正十三／十月九日」と朱書、「セタ大寺」と墨書されている。

平瓦の体部から広端部で、側面部は残存していない。凹面は摩滅著しいが、布目痕が残り、凸面は縦位の縄叩き痕が残る。端面はヘラケズリがされる。灰色を呈し、焼成は良、胎土はやや粗である。奈良時代。

前稿分（13）と91～93・95は朱書されていることから、日付が記されるのは91・92・95だけであるものの、注記形態から大正13年（1924）10月9日に一括採集されたものと考えられる。

x. 109 天津市坂本町滋原（図4-96、写真図版3-96）

①概要

現在の天津市坂本三丁目の字名に残る「滋原」と考えられる。当該地域はJR湖西線比叡山坂本駅と京阪電鉄石山坂本線坂本比叡山口駅に挟まれた地域である。『遺跡地図』から、当該地域には上坂本遺跡（古墳時代～近世、集落・社寺）や坂本八条遺跡（坂本六・七丁目、社寺・生産遺跡、白鳳～平安時代）があるが、瓦の年代観から上坂本遺跡周辺と考えられる。

②採集瓦

96 丸瓦である。凸面に「坂本滋原出土」と墨書されている。

丸瓦の胴部で、両側面部が残る。凸面はやや摩滅気味だが、縄叩きの縦位のヘラケズリがされる。凹面には布目痕と布袋の綴じ合わせ痕、吊紐痕が残る。両側縁部は面取りがされ、端面はヘラケズリがされる。明オリーブ灰色を呈し、焼成は良、胎土はやや粗である。鎌倉時代。

y. 111 天津市坂本町穴太城址

（図4-97、図5-98～106、写真図版3-97～106）

①概要

前稿「l. 111 天津市坂本町穴太城趾」の項参照。

②採集瓦

97 丸瓦である。凹面に「穴穂城大門」と朱書されている。

丸瓦の胴部で、端部は残存していない。凸面は格子叩きの横ナデがされる。凹面には布目痕が残る。オリーブ灰色を呈し、焼成は良、胎土はやや粗である。白鳳時代。

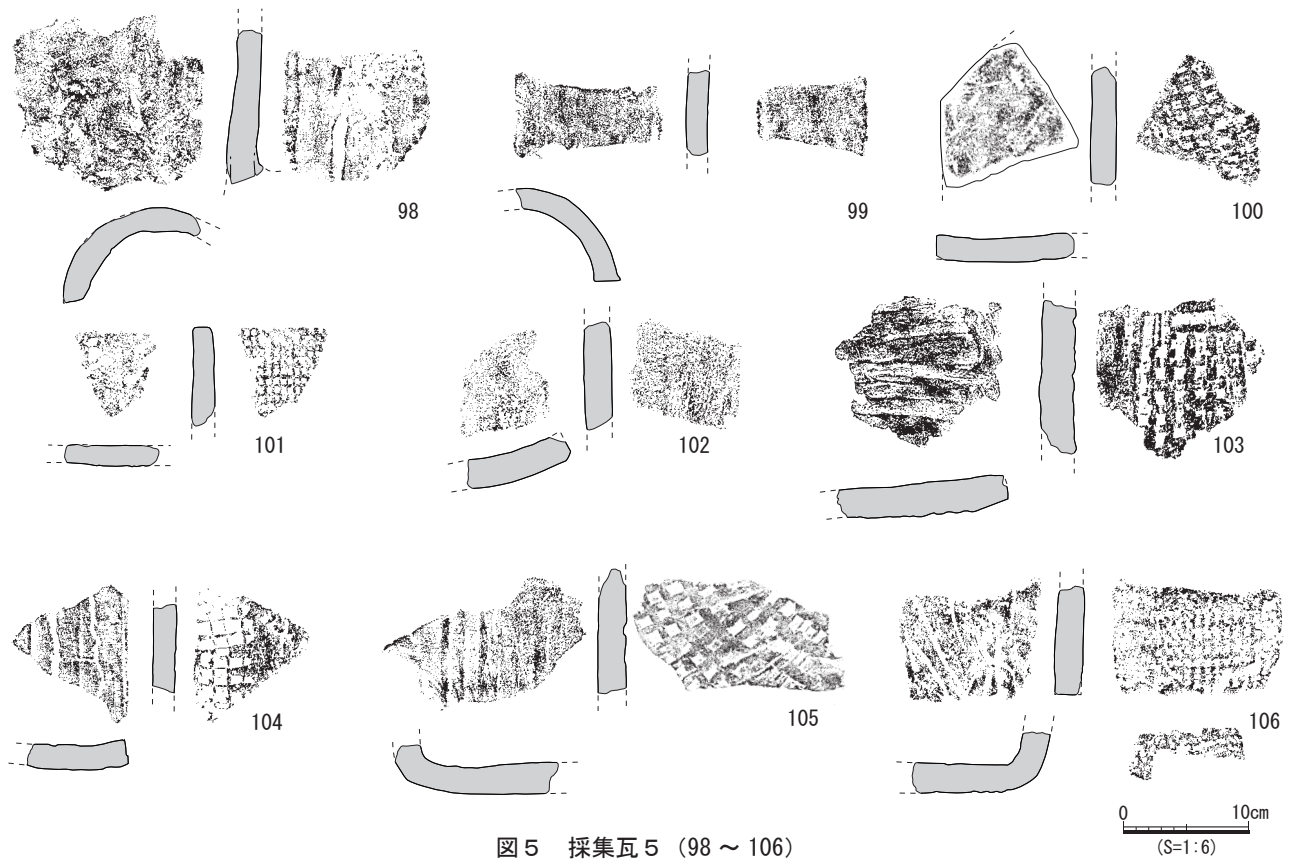
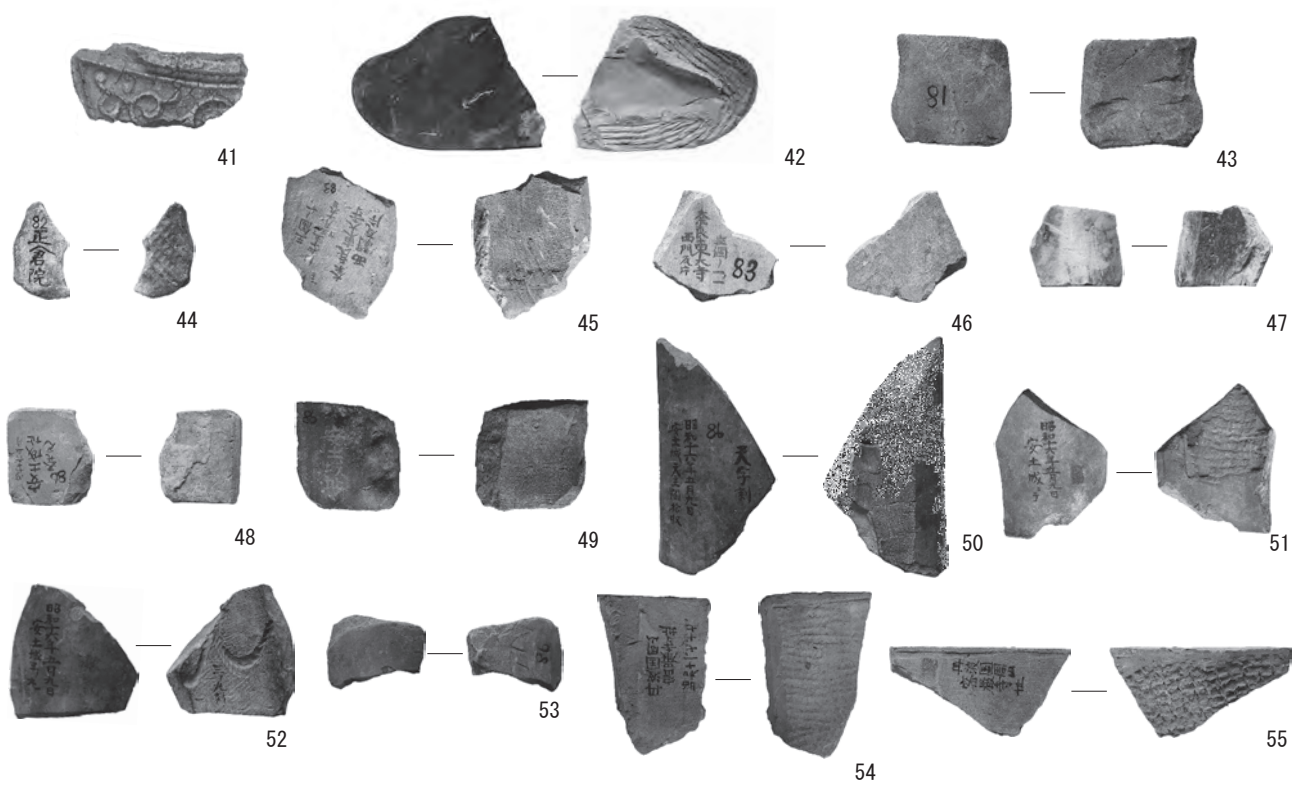


図5 採集瓦 5 (98 ~ 106)



写真図版 1 (41 ~ 55・縮尺不同)

98 軒丸瓦である。凸面に朱書されているが、判読不能である。

軒丸瓦の丸瓦頭端部で、左側面部が残る。凹凸両面とも摩滅・剥離が著しいが、凸面には縦ナデ痕、凹面には布目痕と一部ナデ痕が残る。また、凹面側端縁はヘラケズリがされる。頭端付近には瓦当貼付けのための粘土が貼付けられ、端面はヘラケズリがされる。灰白色を呈し、焼成はやや不良、胎土は良である。白鳳時代。

99 丸瓦である。凸面に朱書されているが判読不能である。

丸瓦の胴部で、右側面部が残る。凸面は摩滅著しいが、縦ナデとみられる。凹面には布目痕が残る。端面はヘラケズリがされる。灰白色を呈し、焼成はやや不良、胎土は良である。白鳳時代。

100 平瓦である。凹面に「穴穂城大門」と墨書されている。

平瓦の体部で、左側面部が残る。凹面には布目痕が残り、凸面は粗い格子叩き痕が残る。端面はヘラケズリがされる。側面に対して斜角に切り落とされていることから、隅切瓦の可能性もある。赤橙色を呈し、焼成は良、胎土は良である。白鳳時代。

101 平瓦である。凹面に「(穴太城カ)」と朱書されている。

平瓦の広端部で、側面部は残存していない。凹面は摩滅著しく調整は不明である。凸面は細かい格子叩き痕が残る。端面はヘラケズリがされる。灰白色を呈し、焼成は良、胎土はやや粗である。白鳳時代。

102 平瓦である。凹面に「穴太城」と朱書されている。

平瓦の体部で、右側面部が残る。凹面には模骨痕と布目痕が残り、凸面には摩滅気味であるが、縦位の縄叩き痕が残る。側端面はヘラケズリがされる。灰白色を呈し、焼成はやや不良、胎土は良である。白鳳時代。

103 平瓦である。凹面に「穴太城大門／拾得」と朱書されている。

平瓦の体部で、左側面部が残る。凹面は粗い横ナデがされ、凸面は格子叩き痕が残る。両面の側端縁と端面はヘラケズリがされる。灰色を呈し、焼成は堅緻、胎土は良である。白鳳時代。

104 平瓦である。凹面に「足利氏／穴穂御所」と朱書されている。

平瓦の体部で、右側面部が残る。凹面は模骨痕と布目痕が残り、凸面には格子叩き痕が残る。側面は模骨につけられた円筒分割用の突帯の痕跡が残る。オリーブ灰色を呈し、焼成は良、胎土は良である。白鳳時代。

105 方形平瓦である。凹面に「穴太城址」と墨書されている。

方形平瓦の平坦部で、端部は残存していないが、狭部と広部の境にあたる。凹面には模骨痕と布目痕が残り、凸面には格子叩き痕が残る。にぶい褐色を呈し、焼成は堅緻、胎土は良である。白鳳時代。

106 方形平瓦である。凹面に朱書されているが判読不能である。

方形平瓦の狭端部から平坦部で、直立部がわずかに残るが、側面部は残存していない。凹面は摩滅著しいが、布目痕が一部残る。凸面と狭端面は格子叩き痕が残る。にぶい橙色を呈し、焼成はやや不良、胎土は良である。白鳳時代。

3. 採集地と遺跡認識について

田中氏は採集地、採集年月日をこまめに記録していたことが注記内容からわかる。しかし、大正時代から昭和初期にかけての遺跡認識及び地名表記と現在の遺跡名及び地名表記が異なることもあり、注記に記された遺跡・場所と現在の遺跡・場所について考察をしていきたい。基本的には、採集地の概要で地名や『遺跡地図』からおおまかな推定はしているが、その際に複数候補を挙げているものを中心に改めて考察していく。

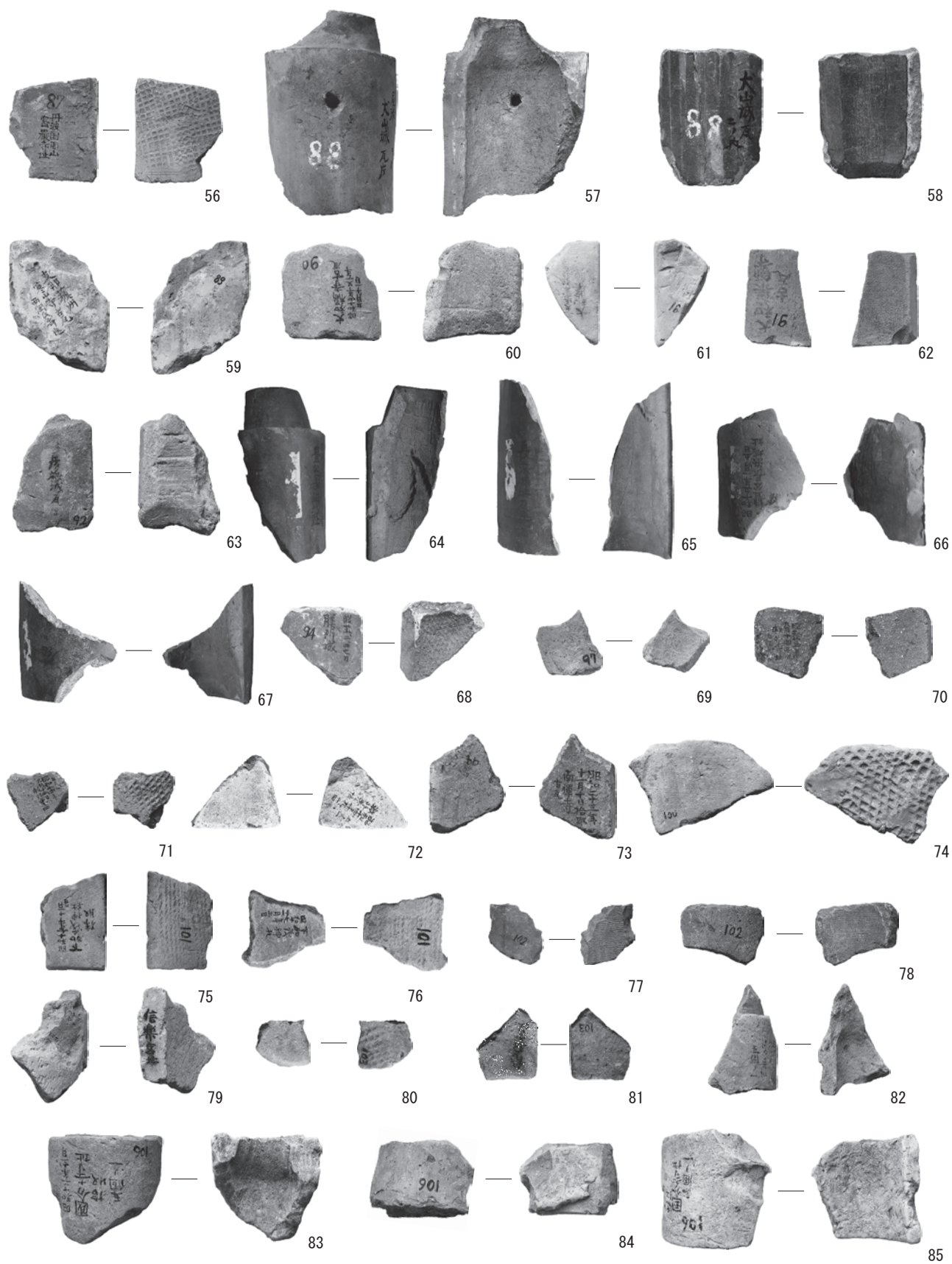
本章では、本稿でも扱っている「救外寺」、「瀬田町三大寺（勢多大寺）」、「穴太城（足利氏穴穂御所）」を取り上げる。なお、引用文の旧字体は新字体にして引用している。

a. 「救外寺」

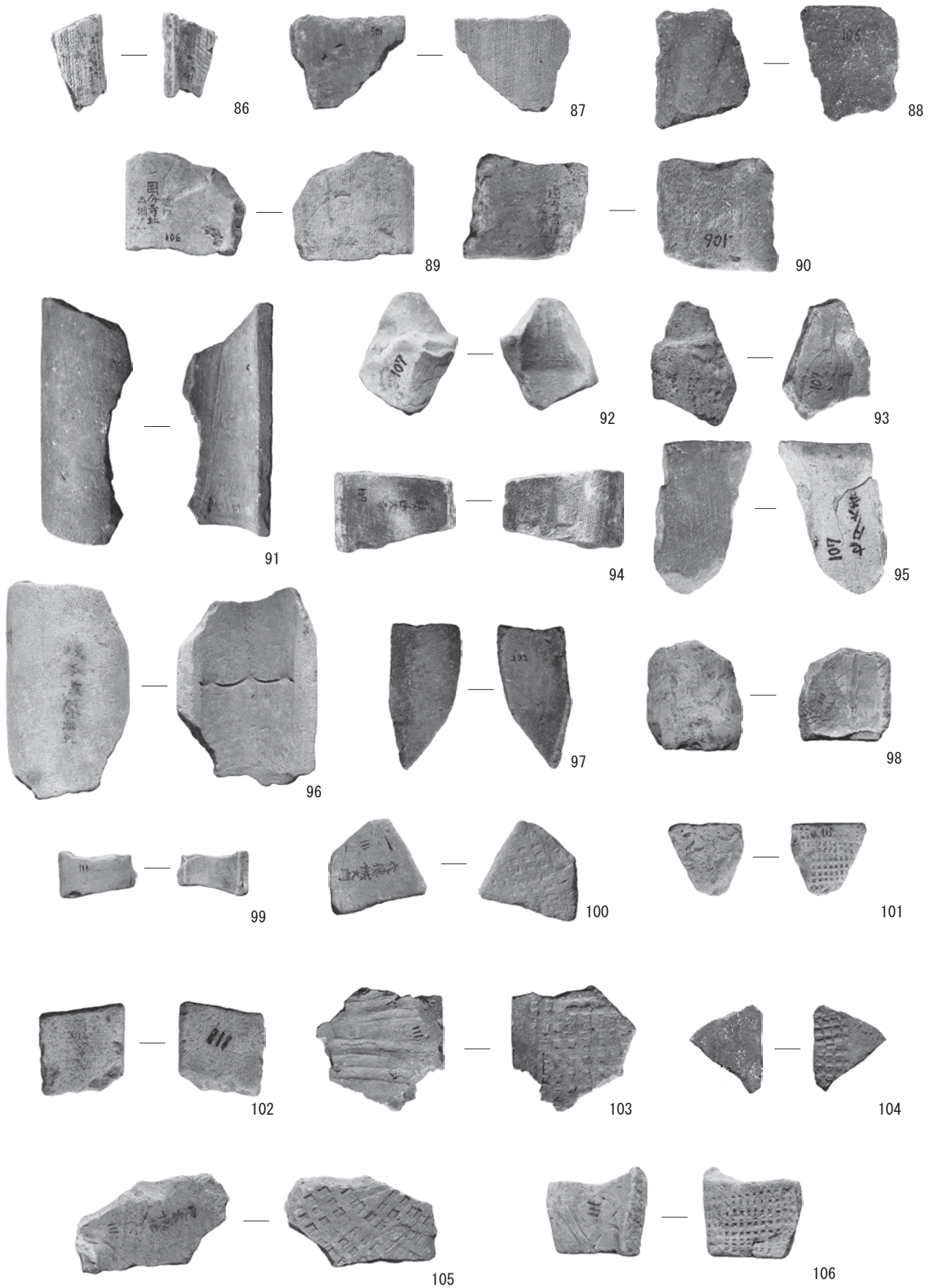
前稿では『平成28年度滋賀県遺跡地図』（滋賀県教育委員会2017）から八島廃寺（八島遺跡）を比定している。「救外寺」採集資料は7と70～72の4点があり、70～72には「救外寺址」と記される。また、「八島寺古瓦」と記される廻隅軒平瓦（31）もある。『目録』では「湯田村八島救外寺」と記される。

「救外寺」については『滋賀県東浅井郡誌』（東浅井郡私立教育会1901）に詳しく書かれている。それによると「救外寺跡ハ八嶋ノ東北方ニアリ。一二空華雨寺トモ書ス。当寺ハ聖徳太子ノ創立」（『滋賀県東浅井郡誌』p.91）とし、「浅井氏ノ菩提所タリ（中略）（足利）義昭逃レテ、浅井氏ニ依リ、此寺ニ館ス」と記されているが、「浅井織田両氏ノ合戦トナリ、織田氏ノ為破却焼失セラレ、寺領没収セラルト云フ」と伝える。つまり、「救外寺」は飛鳥時代に聖徳太子によって創建され、室町時代末期まで存続したものの、浅井氏と織田氏の戦のあおりを受けて廃寺になったと伝えられるものである。

昭和2年（1927）刊行の『東浅井郡誌』（滋賀県東浅井郡教育会1927）には「救外寺」の記述は見られないものの、巻一の巻頭写真に「八島寺倉（？）院址発掘古瓦」という八島瓦窯系軒丸瓦を掲載している。また、p.112～114には、浅井郡湯田村大字八島には、大和国添上郡八島（現奈良県奈良市八島町）の八島寺の倉院があったという記述がある。この八島寺は、桓武天皇が皇太弟の早良親王の冥福を祈るために延暦17年（798）に山陵を営んだことを起源とするという。そして、湯田村八島は八島寺の倉院があったことに因み「八島」という地名が付いたとしている（滋賀県東



写真図版 2（56～85・縮尺不同）



写真図版 3（86～106・縮尺不同）

浅井郡教育会 1927)。しかし、瓦の年代観から見ると、倉院があったとしても年代が下るので、結び付けにくい。

「土中ヨリ布目瓦ヲ発掘スルコトアリ」（『滋賀県東浅井郡誌』p.91）と記されていることから、明治中期には当地で瓦が収集されていたと考えられる。このほか、湯田村には「布目瓦」が出土する寺院についての記述はない。『遺跡地図』では八島遺跡（八島廃寺）は白鳳時代、木尾窯遺跡（八島瓦窯）は白鳳時代～平安時代・室町時代とされる。そのほか長浜市八島町に当該期の寺院関連の遺跡が見られないことから、『滋賀県東浅井郡誌』に記される創建年代および廃絶年代に疑義はあるものの、「救外寺＝八島廃寺」と言って差し支えはないであろう。

では、「八島寺」はどうだろうか。「救外寺址」と記されていないことから、「救外寺址」で採集したわけではないと考えられる。また、八島廃寺と考えると、瓦の時代が室町時代であり、遺跡の年代が白鳳時代のみであるため、存続年代が合わない。そのため、存続している「八島寺」と呼称される寺院があると考えるのが妥当だろう。現在の長浜市八島町には蓮台寺（文亀3年（1503）開基）と玄龍寺（永禄元年（1558）開基）という中世から続く2寺院があるため、このいずれかと考えられる。

b. 「瀬田町三大寺（勢多大寺）」

前稿では近江国府跡、近江国庁跡、瀬田廃寺の可能性を挙げているが、当時の認識などから改めて考察してみたい。各注記は「勢多大寺塔」（13・91）、「セタ／三大寺」（92）、「勢多大寺」（93～95）で、「勢多大寺」と「三大寺」を併記しているものはない。

「勢多大寺」について考える。「勢多大寺」は永正7年（1510）成立という建部大社の『建部大明神神縁年録写』に見える名であるが、『近江輿地志略』には記述がない。このことについては『近江栗太郡志』（滋賀県栗太郡役所 1926、以下『栗太郡志』）の巻一 p.135～p.141 に記載される「国分寺考 三大寺山の寺趾」が詳しい。それによると、勢多大寺は和銅4年（711）、行基によって三大寺山に開基されたと伝わるが、「右の縁起（『建部大明神神縁年録写』）通覧するに（中略）寛政文化の頃近江に來り所々に縁起を記せし大和人椿井某の文体に似たり、されば勢多大寺の説未だ全く信ずべからず」（『栗太郡志』巻一 p.138）と記され、椿井文書の可能性があることが指摘されている。なお、現在の津市三大寺では、発掘調査によって近江国庁の政庁跡などが見つかった。

また、『栗太郡志』巻五にも「勢多大寺」の記述があり、「勢多大寺趾 近江最初の国分寺」、「瀬田村大字神領小字野郷原」（p.565）と記され、瀬田廃寺を指し示している。『栗太郡志』が出版された大正15年（1926）当時は「布目蓮華紋の古瓦片及び敷瓦等広き範囲に亘り散乱し」ていたようである。このことから、田中氏が採集した「勢多大寺」

の瓦は「瀬田廃寺」のものと考えerべきなのであろう。

c. 「穴太城（足利氏穴穂御所）」

前稿では『近江輿地志略』の記述から、「御所跡」と捉えたうえで、瓦の年代観から穴太廃寺の瓦と推定したが、実情を考察したい。なお、注記内容は「穴太足利城」（17）、「穴穂（太）城大門」（97・100・103）、「穴太城」（102・105）「穴穂御所」（104）がある。

『近江輿地志略』巻十五では「御所跡」の項に、「足利將軍源義晴公、（中略）坂本の常在寺に御座をかまえる。又夫より穴太の新坊へ、御座を移され（中略）天文十九年（1550）五月四日戊辰、穴太において薨ず」と記され、「穴太の新坊」なる場所に移り、同地で没したと記される。場所特定の手がかりとしては、「穴太の新坊」という場所が穴太村内にあったということがわかるが、旧跡については遺存していないと思われる。

『近江國滋賀郡誌 全』所収の『穴太村誌』（明治14年（1881））では、「足利義晴墓」が記され、それによると「天文十四年（1545）乙巳職ヲ辞シ、三好晴元等ニ脅迫セラレ、処々流離シ、同十九年庚戌本村山中ニ薨ス。相伝フ在昔安福寺ト号スル寺址アリ。其址中ニ墓碕アリ。高サ三尺許頼珍逆修ト鐫録ス。即チ義晴ノ墓ナリト未ダ之ヲ詳ニセス」（『近江國滋賀郡誌 全』p.380）として、墓所が現存する旨が記されている。なお、田中氏が奉職した高穴穂神社から南に200mほどのところに「頼珍逆修」と刻まれた石塔が足利義晴供養塔として現存している。

『新撰近江名所図会』（清水1909）では、「足利義晴寓址」が紹介され、「穴太萬松院此を穴太新坊と云ふ」と記されていることから、田中氏の記す「穴太城」や「穴穂御所」は「穴太萬松院」を指すと考えられる。

「穴太萬松院」の場所は詳らかではないが、『近江輿地志略』などの記述から鑑み、足利義晴供養塔の位置が動いていないことを前提に考えると、現在の津市穴太二丁目近辺で採集されたものと考えられる。足利義晴供養塔のある場所は、『遺跡地図』によると、穴太遺跡の範囲内ではあるものの穴太廃寺跡の範囲からは外れる。しかし、近接していることから、採集された瓦は穴太廃寺の瓦と想定することができる。

4. おわりに

本稿では、前稿に引き続き資料報告を行い、また、採集地について一部改めて考察を加えた。前稿では、本稿で「八雲書院資料調査報告＜瓦編＞」を終了する予定としていたが、残り資料数を鑑み、次稿で残り59点の報告と瓦編の目録を作成し、掲載する予定である。

本稿における錯誤は偏に筆者の浅学によるものであるもので、読者諸氏の忌憚ない御意見を頂戴したい。

〔謝辞〕

資料調査に当たり、長浜市市民協働部の古山明日香氏に手続等を、また、浅井歴史民俗資料館の清水隼子氏・住知亜紀氏・富岡有美子氏・中山美穂氏・福井智英氏には多大な御厚情を賜りました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

また、本稿執筆に当たり、北原治氏・小島孝修氏・辻川哲朗氏・富岡有美子氏・福井智英氏には貴重な御意見を頂戴しました。併せて厚く御礼申し上げます（いずれも五十音順）。

文献一覧

芦田淳一（2019）「大和一中世瓦とその資料的可能性―」『中世瓦の考古学』中世瓦研究会編 高志書院

浅井中学校（1952）『八雲書院蔵品目録』

市本芳三（1995）「12. 瓦」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社

上原真人（1990）「平瓦製作法の変遷―近世造瓦技術成立の前提―」『今里幾次先生古稀記念 播磨考古学論叢』今里幾次先生古稀記念論文集刊行会

大津市歴史博物館（2017）『大津の都と白鳳寺院』

大津市歴史博物館（2022）『大友皇子と壬申の乱』

大脇潔（1991）「研究ノート 丸瓦の製作技術」『研究論集Ⅸ』奈良国立文化財研究所学報 第49冊 奈良国立文化財研究所

小笠原好彦・田中勝弘・西田弘・林博通（1989）『近江の古代寺院』真陽社

小山正忠・竹原秀雄（2014）『新版 標準土色帖（36版）』日本色研事業株式会社

粕渕宏昭（2000）「田中礎コレクションについて」『民俗文化』第437号 滋賀民俗学会

北村圭弘（2008）「二、律令国家の形成と地方寺院―近江を舞台として―」『仏法の初め、茲より作れり―古墳から古代寺院へ―』滋賀県立安土城考古博物館

北村圭弘（2019）「近畿地方東部の一本づくり・一枚づくり」『第19回シンポジウム 8世紀の瓦づくりⅧ―一本づくり・一枚づくりの展開2―発表要旨』奈良文化財研究所

京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（2010）『飛鳥白鳳の薨～京都市の古代寺院～』京都市文化財ブックス第24集 公益財団法人竹中大工道具館（2017）『千年の薨 古代瓦を葺く』

小松葉子（2022）「大津市神領所在瀬田廃寺造営過程の検討」『紀要』第35号 公益財団法人滋賀県文化財保護協会

古山明日香・福井知樹（2022）「長浜市八雲書院資料調査報告＜瓦編1＞」『紀要』第35号 公益財団法人滋賀県文化財保護協会

財団法人京都市埋蔵文化財研究所（1996）『木村捷三郎収集瓦図録』

崔ゴウン（2018）「古代における瓦の製作道具について～『桶巻作り』による平瓦と丸瓦の復元作業を通して～」『竹中大工道具館研究紀要』第29号 公益財団法人竹中大工道具館

佐原真（1972）「平瓦桶巻作り」『考古学雑誌』第58巻第2号 日本考古学会

寒川辰清（1734）『近江輿地志略』

滋賀県（2022）『令和3年度 滋賀県遺跡地図』

滋賀県教育委員会（2017）『平成28年度 滋賀県遺跡地図』

滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会（2001）『穴太遺跡発掘調査報告書Ⅳ』（一般国道161号（西大津バイパス）建設に伴う）

滋賀県栗太郡役所（1926）『近江栗太郡志』巻一～巻五

滋賀県東浅井郡教育会（1927）『東浅井郡誌』

滋賀県ミュージアム活性化推進委員会（2019）『水谷隆信収集資料図録』

滋賀県立安土城考古博物館（2008）『仏法の初め、茲より作れり―古墳から古代寺院へ―』

滋賀県立安土城考古博物館・財団法人滋賀県文化財保護協会（2011）『大國近江の壮麗な国府』

清水湖州（1909）『新撰近江名所図会』文泉堂

鈴木良章（2019）「紫香楽宮関連遺跡群とその発掘調査」『紫香楽宮と甲賀の神仏 紫香楽宮・甲賀寺と甲賀の造形』MIHO MUSEUM

坪井利弘（1976）『日本の瓦屋根』オーム社

仲川靖（1989）「3. 穴太廃寺の建立と再建の年代をめぐる」『滋賀県埋蔵文化財センター紀要3』滋賀県埋蔵文化財センター

日本史広辞典編集委員会編（1997）『日本史広辞典』山川出版社

林博通（1989）「2. 穴太廃寺の建立と再建の年代をめぐる―一椀木原瓦窯・穴太瓦窯関係資料―」『滋賀県埋蔵文化財センター紀要3』滋賀県埋蔵文化財センター

東浅井郡私立教育会（1901）『滋賀県東浅井郡誌』

日永伊久男（1982）『南滋賀廃寺出土瓦の研究』

藤岡謙二郎監修（1979）『近江國滋賀郡誌 全』弘文堂書店

平凡社地方資料センター編（1991）『滋賀県の地名』平凡社

松浦俊和（2019）「古代近江の宮都と寺院」『紫香楽宮と甲賀の神仏 紫香楽宮・甲賀寺と甲賀の造形』MIHO MUSEUM

三辻利一・北村圭弘（1989）「八島瓦窯一瓦の需給関係と工人の動向―」『紀要』第2号 財団法人滋賀県文化財保護協会

挿図典拠

表1 古山・福井2022に加筆

図1～5 富岡有美子（浅井歴史民俗資料館）・福井・山田実測

写真図版1～3 福井撮影

（ふくい ともき：調査課 技師）

ANNUAL BULLETIN
of
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritage
Vol.36 2023.3

私たちは文化財をととして
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。



公益財団法人滋賀県文化財保護協会
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritages